

シンポジウム「後期中等教育の当面する諸問題」(要旨)

〔於、第14回高等学校教育研究会(10月27日、本校で)〕

司会 名古屋大学教授兼教育学部附属高等学校長 田 浦 武 雄
講師 国民教育研究所所員 木 下 春 雄
(生活指導の立場から)
愛知教育大学教授 橋 爪 貞 雄
(教育社会学の立場から)
名古屋大学教授 本 山 政 雄
(教育行政・制度の立場から)

司会 今日、後期中等教育は様々な問題を持っている。例えば、愛知では、学校間格差の問題であり、それをなくそうとして学区制の問題があるが、これも、進学率の上昇と過密化などのダイナミックな関係の中あらわれて来ている。今日は、問題点とその対策を高校生の問題状況という点から木下先生に、愛知の学区制の再編と学力差にどう対処するか、という点について橋爪先生に、行政・制度の面から本山先生に話して頂く。

木下 今日の教育制度の問題状況は、「教育における競争の組織化、体系化」といえるが、このような状況の中から差別・選別の問題が出てくる。一般的には、生活様式の平準化ということはいわれているが、知的な面の断層はないのか、差別・選別は、社会の階層化を基盤としており、一般勤労者の高校・大学へという希望は実っていない。知的・文化的な格差は埋っていない。このような中で、高校は、その中間帯としての役割を果たしている。

高校生の問題状況については、新聞によれば、アメリカでは、高校生のマリファナ、性病が大きな問題となっているが、日本でもそれをよそ事として考えられず、競争、競争社会の中で知的荒廃状況を呈している。自信と敗北感のはげしい振幅の中で、大きくゆれ動く心理が指摘できる。

以上の知的・文化的断層の拡大、また競争からの脱落のまねく敗北感から、今日の問題状況を指摘できる。

橋爪 愛知を例に高校の格差・生徒間の学力差についてふれる。(以下、愛知の学校群制度とその特徴を東京と対比して説明)東京の群の閉鎖性に対し、愛知の場合は鎖状を通して影響は及びやすく、平準化作用は一層期待でき、各学校内の(入試合格者の)上下巾

は広がる。従って、この広がりを教師が、下限が下がっただけなのに全体のレベルダウンと考える(東京の場合)恐れはないか、この状況への対処を考えることが必要。

本山 世界的な青少年問題の表面化の中で、高校・大学入試をめぐる問題は、日本の特色となっている。愛知の学区制は、大学区制下での高校教育の行きづまりを示している。戦後の教育改革、教育の原点に立ちかえることが必要。三原則、義務制を原点は示している。希望者の全入を、京都に学んだ。25~26年より、教育の論理より経済の論理が貫ぬいてきている。今一度、新制高校の理念、24年の教育課程、生徒の自主性・創造性、教師の自由などを三原則のもとに考えたい。

〔補足〕

木下 多くが進学しない職業学校の生徒達の状況を、日本の高校の問題状況を考える時忘れてはならない。総合技術教育を展望した総合制学校を考える必要はないか。

橋爪 実際の差より受けとる方の意識が大きいことをどう考えるか、データは入試時の成績であり、その妥当性をどう考えるか、という問題がある。全体の高校としては、総合性が必要、また中教審答申と反対に必須をふやすことが原点に立ちかえることだ。子どもの能力は確かに学力では差があるが多面的な能力を生かしたもので構成される総合性を考えたらどうか。

本山 今日の高校問題の解決には、一つは学歴偏重、もう一つは、大学をどうするか、という点がある。中教審答申は、大学の格差をつくろうとしているが、今日の大学をどうするかは、大問題である。

〔会場から質問〕

① 入試方法の改善、学力とは?

② 「能力に応じて」は危険と思うが「適性に応じて」はよいと思うが。

③ 高校教育までは、すべての者にとと思うが。

木下 分化の時期について高校へいく段階で分かれるのは問題、もっとも高3になっても進路がわからないというのもまた教育の責任。入試については、改善できるところから制度と内容の両改革が必要。

橋爪 入試改善については、色々と経験をし苦労したが、これならばという方法はみあたらない。学力以外の面での評価も非常にむづかしいし、子どもの適性

・個性をとらえることは現行のカリキュラム内では、できない。分化の時期については、中学までは同じ教育、その先は適性に応じた教育を15才から2~3年、自分自身の能力を多面的に経験、わからせる教育を考えたい。

(以上、時間の制約のために、報告者の報告と問題提起が主となり、講師間の討論、フロアーとの討論・質疑応答などはほとんどできないままに終わったことは残念であった。)